

2018. 1. 25 山城

第 126 回 『ボンビバ錠/ボンビバ静注』 大正富山医薬品 濱田祐介様

参加者：小西、佐藤、照本、番場、山城

骨の強度が低下して骨折するリスクが大きくなる病気を骨粗鬆症という。骨の中がスカスカになってもろくなりちょっとしたことで骨折しやすくなる。

この薬は骨に付着して、骨のカルシウムが血液に溶け出すのを防ぎ（骨吸収抑制作用）、骨の密度が増加し骨折の予防も目的とするものである。

【効能・効果】

骨粗鬆症

本剤の適用にあたっては、日本骨代謝学会の診断基準等を参考に、骨粗鬆症との診断が確定している患者を対象とすること。

【用法用量】

通常、成人にはイバンドロン酸として 100mg を 1 カ月に 1 回、起床時に十分量（約 180mL）の水とともに経口投与する。

なお、服用後少なくとも 60 分は横にならず、飲食（水を除く）及び他の薬剤の経口摂取を避けること。

【特徴】

- ・ビスホスホネート系の骨粗鬆症治療薬。
- ・同系のなかで第二世代に分類されることがあり、第一世代のエチドロン酸（ダイドロネル）に比べ骨吸収抑制作用がはるかに強力で安全域が広く骨軟化の副作用を生じにくい。
- ・月 1 回、錠剤と静注の 2 タイプ。
- ・早期から骨吸収マーカーを抑制（投与後 1 ヶ月）、骨親和性が低いため、破骨細胞に取り込まれやすい。

- ・服用後 60 分は横になれない制限がある。

【副作用】

*重篤な副作用

上部消化管障害（食道炎、食道潰瘍、胃潰瘍など）、下血（血液便、黒いタール状の便）

ショック、アナフィラキシー：気持ちが悪い、冷汗、顔面蒼白、手足の冷え・しびれ、じんま疹、全身発赤、顔や喉の腫れ、ゼーゼー息苦しい、めまい、血圧低下、目の前が暗くなり意識が薄れる

顎骨壊死や顎骨骨髓炎：歯茎の腫れ・痛み、あごのしびれ感・腫れ、抜歯など歯科治療後に腫れや痛みが続く

外耳道骨壊死：外耳炎、耳だれ、耳の痛み

大腿骨の非定型骨折：太もも、足の付け根、腰の痛み

低カルシウム血症：手足のふるえ、しびれ、筋肉の脱力感、筋肉の痙攣など

*その他

下痢、腹痛、胃の不快感、吐き気、胃炎、頭痛、背中の痛み、関節痛、倦怠感など

【考察】

骨粗鬆症は骨がスカスカになり骨折しやすくなる病気で骨全体が弱まって骨折してしまうため、折れてしまった骨が元に戻るまでに時間がかかるようになってしまう。また、骨折が原因で日常生活行動（ADL）の低下、さらには寝たきりになってしまうことが大きな問題となっている。高齢化社会に伴い、骨粗鬆症になる人の割合は高くなると考えられる。骨粗鬆症の患者の約6割以上が高血圧や糖尿病、慢性腎臓病などの生活習慣病を患っている。骨粗鬆症がこのような生活習慣病と一環して発症すると示唆される。脆弱性骨折やそれに次ぐ再骨折を防ぐための予防や治療を患者の側で薬剤師は継続的に医師と共にサポートし続けなくてはならない。

【質疑応答】

Q：タイミングが4週ごとではなく1ヶ月に1度なのか？

A：保険上、毎月同じ日付けに服用または静注する。数日ずれても問題ない。

Q：他の骨粗鬆症治療剤からの切りかえの指標は？

A：骨密度上昇の反応率を見て判断している。

Q：デイリー製剤がある理由は？

A：効果が高いと考える Dr が多いからではないか。